

初期ハイデガーにおける生と気づかい

奈良県立医科大学看護短期大学部

池 辺 寧

Leben und Sorgen beim frühen Heidegger

IKEBE Yasushi

Nara Medical University College of Nursing

要 旨

ハイデガーは初期フラインク講義で事実的生の分析を行っている。本稿では、特に自己世界と気づかうことに焦点を当て、彼の分析を再構成することを試みた。ハイデガーが問題としているのは、自己世界を中心にして展開される具体的なこの私の生、及び生世界である。生世界には同時に、共同世界や周囲世界も含まれている。だが、生世界は自己の状況と密接に関連しているゆえ、まず求められるのは自己世界のあり方を鮮明にすることである。このことは、私がいかに生きているのかを解明することでもある。生きることは、ハイデガーによれば、個々の状況において出会う諸対象や出会いそのものを気づかうことである。本稿では、気づかうことの特徴として、誰しも独自の気づかいの世界を有すること、世界は気づかいの仕方に応じて周囲世界・共同世界・自己世界に区分されること、気づかうことが無自覚的な習慣となることにより頽落が生じること、などを指摘した。

キーワード：ハイデガー 事実的生 自己世界 気づかうこと

初期フラインク講義と題される一連の講義（1919-1923年）のなかで、ハイデガーは生、ないしは事実的生を哲学の中心的な主題として取り扱っている。彼はたとえば次のように述べている。「哲学は生そのものの根本的なあり方であるゆえ、生をそのつど本来的に取り返す。すなわち、転落から取り返す。そして、根本的な探究である取り返し自体も生にほかならない」（GA61,80）。ここで主題となっている生は、転落（頽落）する傾向にある生、及びそこから取り戻そうとする生である。初期ハイデガーの目論見に従えば、そういった具体的な生、すなわち、事実的生の存在をそのつどのあり方において言及し解釈することが哲学の課題である（vgl.PIA246f.）。

生について考えるとといっても、ここで問題となっているのは生一般ではなく、今ここで

生きている具体的な私の生である。そうした生に、ハイデガーは「事実的」という形容詞を付す。つまり、一定の場所、独自の人間関係、等々のなかで生き、自己固有の歴史を築き上げているこの私が何を経験しているのか、何を気づかっているのか、こういったことをハイデガーは「事実的生」という語を用いて問うているのである。したがって、抽象的・客観的な生一般が問題となっているわけではない。なお、事実的生という術語は、「現存在（事実的生）」「事実的生（現存在）」といった言い換えを経て（GA63,80f.）、後に「現存在」という語に取って替わられることになる。本稿では、事実的生の分析を素描することによって、『存在と時間』（1927年）へと到るハイデガーの哲学形成の一端を理解する手がかりとしたい。

1. 事実的な生経験と哲学

日常的には自明と思われている事柄を俎上に載せ、解体し、根拠を問い、再構築していくこと、これらのことが哲学的思索に課せられている作業であろう。だが、哲学的思索は日常的な経験から遊離したところで、問いを立てて言葉をもてあそんでいるわけではない。思索の出発点となるのは今ここに生きるこの私であり、思索の対象となるのは私、及び私を取り巻く日常的な経験、ハイデガーの言葉で言えば、「事実的な生経験 (faktische Lebenserfahrung)」である。事実的な生経験と哲学との関係について、彼は次のように述べている。「哲学は事実的な生経験に由来する。そしてさらに、哲学は事実的な生経験のうちで、生経験そのものへと跳ね返る。土台にあるのは事実的な生経験という概念である」(GA60,8)。「哲学への道の出発点は事実的な生経験である」(GA60,10)。

事実的な生経験のうちには、ひとを哲学的思索へと導く契機が内在している。しかし、哲学への道はただ哲学の前へと通じているだけであり、哲学にまで至っているわけではない。契機が顕在化し、哲学的思索を営みはじめるためには、「態度変更」(GA60, 10,15)が必要である。もっとも、意識的に態度変更し続けることには困難を伴う。困難を説明するにあたってハイデガーは、「事実的な生経験は経験の仕方に関しては無関心である」ことに着目する(GA60,12)。彼によれば、事実的な生経験は「世界に対する人間の能動的、及び受動的なすべての態度」を意味しており、知見を広めるような単なる経験以上のものである(GA60,11)。だが、事実的な生経験は、何に関わっているのかという経験の内容にひたすら力を注いでおり、いかに関わっているのかという経験の仕方には無関心である。経験の仕方はせいぜい内容に随伴しているだけである。ハイデガーは次のような例を挙げて、無関心についての説明を行っている。

「事実的には、私はある状況では学問的な講演を聞き、その後、同一線上で、日常的な

事柄について話し合う。そのとき状況は本質的に同じであり、内容だけが変わっているにすぎず、一定の仕方では態度が移り変わったことは私には意識されない。学問的な諸対象も、いつでもまずは事実的な生経験の性格において認識されているからである」(GA60,14)。

「この〔事実的な生〕経験の経過は、一貫して無関心という性格を有しており、私が経験するものの相違は、内容のうちに生じている。私はコンサートでは、たわいのないおしゃべりとはまったく違った気分を感じ取るが、この相違を私はもっぱら内容から経験しているのである。経験の多様性は経験されたものの内容のうちでのみ、私の意識にもたらされる。それゆえ、私がそこに居合わせている仕方や、世界と同行している仕方は、無関心である」(GA60,16、〔 〕内は引用者の補足。以下同様)。

事実的な生経験は、「言わば生のあらゆる要件」(GA60,12)を引き受けている。だが、仕事をしたり遊んだり、落胆したり高揚したり、等々の生の経験の移り変わりは内容そのものに依拠しているのであって、経験の仕方には無関心である。そして、この無関心さが、自己自身と向き合うことのない生の自己充足性(後述)の基礎となり、哲学的思索を営みはじめるための態度変更を困難にしているのである。したがって、ハイデガーは次のように述べる。「事実的な生経験はその無関心と自己充足性によって、ひょっとして姿を現すかもしれない哲学的な傾向さえも、いつでも繰り返し覆い隠してしまう。自己充足している心くばり(Bekümmerng)において、事実的な生経験は絶えず有意義性へと転落している」(GA60,15)。

事実的な生経験において経験されるすべてのものは、その内容に応じて「……のために」と有意義化されている。有意義性は経験の内容を規定している。それゆえ、有意義性への転落といっても、ここでは、自分が関わっている内容ばかりにとらわれ、自己自身と向き合わないでいる事態を指しているのである

う。だが、われわれ人間は常に何かに関わっている存在、言い換えれば、いかなるものにも関わらず生きていくことが不可能な存在である。そうである以上、転落（頹落）は、生と切り離して対象化できるような客観的・外在的な出来事ではなく、生が常に担わざるを得ない「最も内在的な宿命」（PIA242）にほかならない。

上で述べてきたように、事実的な生経験は哲学的思索の出発点であると同時に、この経験は哲学的思索から遠ざかる契機でもある。というのも、経験しなければ事実的な生経験を論じることはできないものの、「物とは違って、経験する自己と経験されたものとは切り離すことができない」（GA60,9）ため、経験すればするほど渦中にある生を論じることができないといった「根源的パラドックス」（GA58,2）がどうしてもつきまとうからである。だが、事実的な生経験は哲学することを妨げている当のものであるとはいえ、哲学的思索を営みはじめるにはやはり、事実的な生経験から出発するしか方途はない。

2. 問いの出発点としての即自的生

ハイデガーは 1919/20 年冬学期講義録『現象学の根本問題』の冒頭で、現象学を根源学として捉えたいうえで、「即自的かつ対自的精神の絶対的根源——〈即自的かつ対自的生〉——についての学」（GA58,1）と定式化している。もっとも、「即自的かつ対自的生」という「現象学の問題領域は直接そのままに与えられるものではなく、媒介されなければならない」（GA58,27）。媒介となるものとして、ハイデガーがこの講義のなかで取り上げたのは、生（事実的生）の即自的なあり方、つまり、即自的生である。

先に述べたように、生について考えるといっても、ここでの主題は事実的生である。ハイデガーに従えば、事実的生を論じる際、まず問題とすべきなのは生（生命）が有する根源的な力を探し出すことでもなければ、自然科学的・自然哲学的な問いを引き合いに出す

ことでもない。そうではなく、たいていは決してはっきりと気にかけていないもの、自己との間にまったく隔たりがないものを問題とすべきである（GA58,29）。これは常に何かに没頭し、しかも没頭している自己をことさら意識していない、われわれの生のあり方にほかならない。このような生のあり方をハイデガーは即自的生と名づけ、問いの出発点に据えている。即自的生は、事実的生がたいてい置かれている生のあり方を言い表した語である。「事実的な即自的生」（GA58,37,62f.）というように、二つの形容詞を重ねた表現が用いられるゆえんである。

即自的生とは、われわれがさまざまな事柄に没頭し、その事柄に即して自己を理解している日常的な生のあり方のことであり、「日常性」（GA58,39）と言い換えてもよい。即自的生の特徴として、ハイデガーは自己充足性を挙げる。自己充足性とは、生がそのつど常に、ある世界へと向けられている「志向的構造」（GA58,31）のことであるが、具体的には喜怒哀楽に満ち、利害関係に囚われたわれわれの日々の生活の特徴づけた語であるといつてよい。ハイデガー自身は自己充足性について、こう述べている。「自己充足性とは、即自的生を特徴づけている動機づけの方向である。即自的生が自らの事実的な経過そのものから動機づけを手に入れることによって、動機づけは方向づけられる」（ibid.）。

自らの事実的な経過、すなわち生の有様から動機づけを手に入れているかぎり、即自的生は構造上、自己自身を保持するために自らの外に出る必要はない。それゆえ、「即自的」と言われるのである。逆に言えば、「〈自己充足性〉という現象そのものは、即自的生の内部では、つまり、自己充足性のうちにどままっているかぎりでは見てとることができない」（GA58,41）。自己と隔たりを置いて向き合うことがないゆえ、不完全さや非充足性に対しても、「生は常に自己固有の言葉で語りかけ、かつ答える」（GA58,42）ことで満足している。なお、ここで言われている「自己固

有の言葉」について、ハイデガー自身は特に説明していないが、おそらく無批判的に踏襲している価値観、慣習や伝統などを指しているのであろう。つまり、生は何らかの既成の価値観、慣習や伝統などを踏襲することによって、不完全さや非充足性を直視せずにはいられないのである。

ところで、生は常に、ある世界へと向けられている。このことについて、ハイデガーは次のように述べている。「われわれの生は世界、つまり、そのうちでわれわれが生きている世界であり、そのうちへ、そして、そのつどその内部で生の諸傾向（Lebenstendenzen）が流れている世界である。われわれの生は、生がある一つの世界で生きているかぎりのみ、生として存在している」（GA58,34）。「生の諸傾向」とは、人生論風に理解してはならないものの、われわれが現に生きている生き方や人生行路を指すとみてよい。生の傾向は通常、はっきりと意識されることはない。だが、われわれはある生の傾向へと敢然と身を置くこともあれば、ある傾向がわれわれを打ち負かしたり、われわれに忍び寄ったりすることもある。また、ときには、生の傾向のほうから「……するように」と明確に要求してくることもある（vgl.GA58,32）。いずれにせよ、生の諸傾向は自己世界から生じ、自己世界に中心を置いている。しかも、「自己世界そのものの固有の歴史から、新たな諸傾向に対するさまざまな動機づけが芽生えてくる。この諸傾向を実現させることはそれ自体、自己世界と自己世界のそのつどの実現を準備している諸状況とへ、常に立ち戻ることである」（GA58,63）。

3. 自己世界への先鋭化

生は自己世界にそのつど中心を置いている。本節ではこのことについて、さらに考えていくことにしよう。

私という存在は一番身近な存在である。では、私とは一体いかなる存在なのか。一見自明なようでありながら、いざこの問いに答え

ようと考えはじめると、意志と実際の行為とが必ずしも合致せず、思うようにならない私自身に困り果て、問いは堂々巡りを続け、結局、袋小路に陥ってしまう。一番身近な存在でありながらも、最も謎めいた存在、それが私という存在である。アウグスティヌスが言うように、「私が私自身にとって謎」なのである⁽¹⁾。だが、それでもやはり、私はこの私として生きていかざるを得ない。ハイデガーが事実的生としての私の生にこだわるのは、生の重荷や生きづらさを感じていたからであろう。彼はこう言っている。「事実的生は、自己自身を背負い難いという存在性格を持っている。何かにつけて楽をしようとする事実的生の傾向が、このことについての紛れもない証拠である。自己自身を背負い難いという点において、生は困難なものである。しかも、偶然的な属性の意味においてではなく、その存在の根本的な意味からして、生は困難なものである」（PIA238）。

ハイデガーは 1921 年夏学期講義録『アウグスティヌスと新プラトン主義』のなかで、『告白』第十巻を逐条的に解釈しているが、その最後のところで、アウグスティヌスが用いている *molestia* という語に着目し、この語について詳しく言及している。われわれはハイデガーによる *molestia* の解釈⁽²⁾からも、彼が生身の重荷や生きづらさにこだわっていたことを読みとることができる。まず、アウグスティヌスが *molestia* について言及している箇所を一つ引用しておく。

「おのがすべてをささげてあなたに寄りすがるとき、何のかなしみも苦しみもなくなることでしょ。そのとき、私の生はまったくあなたにみたされ、真に生ける者となることでしょ。……いまのところまだあなたにみたされていない私は、自分自身にとって重荷です。……地上の人生、それは試練にほかならないのではないでしょか。だれが苦痛（*molestia*）や困難を欲する者がありましょ」⁽³⁾。

ハイデガーは *molestia* を「生の事実性」と

捉え、この語に生の困難さを見出している。*molestia* はふつう「厄介」「骨折り」と訳されるが⁽⁴⁾、ハイデガーによれば、*molestia* とは「生にとっての重荷」「生を引きずり下ろすもの」であるという。より多く生きれば生きるほど、また、生が自らの存在の意味をより多く省みれば省みるほど、*molestia* は生じる。*molestia* は断ち切ったり投げ捨てたりできるし、またそうすべきであるような、人間存在に付着したものなのではない。そうではなく、*molestia* は事実的な経験の遂行の様態 (Wie) であり、そのつどの経験のなかで、自己自身を保持することや自己の存在を気にかけることが重荷となったり危機にさらされたり、といった様態に応じて規定されるものである (vgl. GA60,241ff.)。自己の生のあり方はどこまでも、具体的・事実的な経験に即して問われなければならない。ハイデガーはこう述べている。「自己が問題になるということは、ただ自己経験の具体的な連関においてのみ、意味がある。この問題は、客観的な存在 (Vorhandensein) をめぐる問いではなく、本来的かつ自己的に実存しているかどうかについての問いである」(GA60, 280f.)。

私は私の生を生きているのであって、私以外のいかなる生も生きることができない。そうである以上、「私は、私自身についての、ならびに世界における私の生についての傍観者でもなければ、ましてや理論的知識人でもない」(GA58,39)。したがって、この私に問いの鋒先を向けることなく、もっぱら他人の生活を詮索したり、「人類のために」という目標を標榜して、それに邁進したり、あるいは私の生を問う営みを批判したりするのは「滑稽」(vgl. GA61,99) であろう。ハイデガーは次のように述べている。「事実的な現存在がそれ本来のあり方をするのは、常に自己固有の現存在としてだけであり、何か人類全体を代表する現存在一般 (Überhauptdasein) としてではない。人類全体のために憂えるなどというのは、勝手に夢想した責務にすぎない」(PIA239)。さらにまた、『アウグスティ

ヌスと新プラトン主義』の題辞に、アウグスティヌスの『告白』にある、「他人の生活については好奇心から知りたがるくせに、自分の生活はあらためようとしないうる連中！」⁽⁵⁾という一節を掲げているのも (GA60, 158)、ハイデガーの上記のような問題意識の反映であろう。

もちろん、自己世界に中心を置くといっても、世界は自己世界に尽きるわけではない。後に撤回することになるが⁽⁶⁾、この時期のハイデガーは世界を三つの世界に区分している。すなわち、各々の土地柄と密接に関連した周囲世界、自分を取り巻く人々からなる共同世界、私個人の生活のリズム (Rhythmik) を私の生に与えてくれる自己世界、これら三つの世界である (GA58,33)。私の生は常に何らかの仕方で、こうした世界のうちに生きているのであり、私の生と出会っているさまざまなものも「生という性格 (Lebenscharakter)」(GA58,35) を持っている。ハイデガーが挙げている例で言えば、「書き机、聴講者としての皆さん、図書館、物理学の諸法則、歴史的な史料……」(ibid.) など、われわれが関わっているすべてが生という性格を持っており、生世界 (Lebenswelt) を形づくっている。

生世界とは、生が世界に関係づけられている事態を言い表している。だが、生と世界とは、たとえば机と椅子のように、それぞれ別箇に存在し、そのうえで空間的に関係している二つの客体なのではない (GA61,86)。生が世界に関係づけられているということは、世界のうちで生が遂行されていることを表している。そして、関係づけられているがゆえに、世界のうちに現れる諸事物や他者がいかに生という性格を有するのかわれわれは予め把握でき、それらと関わっていくことができる。

むしろ、自己世界だけでなく、共同世界や周囲世界も存在してこそ、生世界は十全な世界となる。だが、やはり、生世界は、自己世界があってはじめて成立する。それゆえ、生世界に出会うということは、自己が置かれている状況に出会うことにほかならない。「生

世界はあれこれの仕方、自己世界のそのつどの状況へ、ないしは状況に対して告知されている」(GA58,62)。生世界は置かれている状況に応じて変容・修復されながらも途切れることなく、かつ絶えず時間的にズレながら持続していくのだが、このことは各々の生が「時間化という性格(Zeitungscharakter)」(GA61,97)を持っているからである。常に新たに更新され、続いて起こる状況のうちでは生きており、こうした状況のなかで経験していることや気づかっていることを通じて、私という存在が規定されることになる。「私は世界において、私に会う。つまり、そのうちで私が生きていところのもの、私がそれと関わっているところのもの、私が成功したり失敗したりしているものにおいて、私の周囲、私の周囲世界、私の共同世界において、私は私に出会っている」(GA61,95)。

ハイデガーが問題としているのは自己世界である。自己世界が問題となるのは、ここで問われている「事実的な即自的生は常に、自己固有の世界のうちで生きてい」(GA58,62f.)からであり、「事実的生は自己世界への注目すべき先鋭化(Zugespitztheit)において生きられ、経験され、それに依りて歴史的にも理解されている」(GA58,59)からである。もちろん、自己世界への先鋭化は他の二つの世界の否認を意味しているわけではない。むしろ、自己世界が浮き彫りにされることに依りて、周囲世界や共同世界も明確に規定される。それゆえ、「自己世界の機能的強調」(GA58,60)として、先鋭化がはかられるのである。だが、自己世界を強調するといっても、ただ単に自己世界を個別的に強調して取り上げることを意味しているのではない。自己世界の強調とは、今問題となっている生、特に重視している生の傾向の遂行や流れを強調することである。つまり、個々人が個々の状況において、何を重視して生きていのかを鮮明にすることである。

その際、ハイデガーは自己を語るという行為に着目する。というのも、自己を語るとい

う行為は、その人固有の生とその内的経験を表現にもたらすことによって、その人を自己自身に向き合わせるという性格を持つからである。彼は次のように述べている。「自己世界を大々的に告白することにおいて、最も自己固有な生の内的な自己経験を練り上げ具体化することは、生の表現でさえある。……告白することによって、そのつど馴染みとなってきた生世界に対する、常に生き生きとした自己の態度が、自己の歴史と一つになって表現にもたらされる」(GA58,58f.)。

4. 気づかうこと

「生」という語は、使われる文脈や意図に依りてさまざまな意味を有する曖昧な語である。曖昧さや多義性を抱え、茫漠としたまま用いられている語であるが、生は誰にとっても身近であり、自らと切り離すことができないゆえ、われわれはこの語に関心を持たずにはいられない。

本稿の冒頭で述べたように、ハイデガーは、生をそのつど本来的に取り返すことを哲学の課題とみなしている。では、そもそも生とは何か。生という現象の意味を明らかにするためには、生(Leben)という語をまずは動詞として受け取らなければならないとハイデガーは主張する。彼によれば、生きること(Leben)は根本的には気づかうこと(Sorgen)として解釈されなければならない。生きることとは、「何かのために気づかい、何かのことで気づかい、そして何かを気づかいつつ生きること」(GA61,90)にほかならない。もっとも、「このように性格づけたからといって、いつも悲愴な面持ちをしながら生きていくことを意味しているわけではない。陽気に騒いで興奮しているときも、何にも心を動かされないときも、沈滞した状態にいるときも——どのようなときであれ、〈生きること〉は気づかうこととして性格づけられる」(ibid.)。

生きることとは、さまざまな仕方世界と関わっていくことである。われわれが世界といかに関わっているのか、言い換えれば、日

々いかに活動しているのか、このことをハイデガーは「気づかうこと」という一語で端的に言い表そうとしている。たとえば、仕事をする、テレビを見ること、友人とおしゃべりをする、等々、日常のごくありふれた出来事はもちろんのこと、「〈日々の糧〉を心配すること」(GA61,90)や「人生における究極の選択を行うこと」(PIA240)などもすべて気づかうことである。気づかうことという語は事実的生を、個々の具体的な場面に即して説明するのに先立って、根源的で本質的な次元で把握した語である。「気づかい(Sorge)」という現象は現存在〔事実的生〕の根本現象として見てとられなければならない。この現象を理論的・実践的・情緒的な構成要素から合成することはできない」(GA63,103)。

気づかうことには、上で引用したように、「何か」という対象が絶えず伴っている。当人にとって気がかりな諸対象との志向的な関係がなければ、気づかうこと、さらに言えば、われわれの生の経験は成り立たない。「気づかうことはさまざまな対象を、そのつどの出会いにおいて経験することである。……あらゆる経験はそれ自体において、出会い、しかも、気づかうことへの、ないしは気づかうことに対する出会いである」(GA61,90f.)。ここで言う対象とは、われわれの経験を通じてはじめて価値が付加されるような「裸の現実」(GA61,91)のことではない。むしろ、対象にはすでに何らかの価値性格や私にとっての意味が付与されている。だから、われわれは必要であれば、その価値性格に応じて対象を取捨選択をしたり、価値を高めたり低めたりすることができるのである。

こうして、さまざまな対象と関わることによって成立しているのが、「気づかいの世界(Sorgenswelt)」(GA61,96)である。日常的にはわれわれは「気づかいの世界」に生きている。生きることとは、そのつどの経験において出会っている諸対象や出会いそのものを気づかうことである。仕事、遊び、家事、育

児、健康管理、種々の人間関係、車や植木の手入れ、等々、具体例はいくらでも挙げられるだろう。ハイデガーはこう述べている。「生は日常性においては、出会う世界として、すなわち、配慮的に気づかわれ、かつ気づかうことによって関係づけられた世界として、現に存在している」(GA63,103)。

各人はそれぞれ独自の「気づかいの世界」を有している。自己世界とは各自独自の「気づかいの世界」を指す。この世界は自己完結した閉鎖的・内面的な心の世界ではなく、自己を起点として築かれ、自己が気づかっているものに応じて絶えず変化する世界である。したがって、たとえば他者とともに生きるということは、他者に何らかの仕方で気づかいつつ関わり、その他者にとっての「気づかいの世界」のうちに私自身を見出すことであり、同時に私の「気づかいの世界」のうちに他者を見出すことでもある。自己世界といっても、その世界にはすでに他者が存在している共同世界である。ハイデガーが「私の共同世界的自己世界」(GA61,96)という表現を使うゆえんである。

もともと、ここで出会っている他者とはあくまで、私との関係のなかで、私に対して現れてくる他者のことである。ハイデガー自身はこう述べている。「他の事実的に生きる者が出会われる者のうちに現れることは、〈共同世界的〉という語によって一層詳しく規定される。すなわち、他者は事実的に生きる者として、〈世界的〉に出会われる。他者は〈関係を築き〉、ともに仕事をし何かを企てる者として出会われる」(GA63,99)。他者とは、ハイデガーにあってはあくまで、私とともに仕事をして何かを企てる存在であり、「彼の地位、外見、業績、成功や失敗」(ibid.)などにもとづいて、私によって理解される存在である。

周囲世界もまた、自己世界と別箇に存在しているわけではない。「私の共同世界的自己世界における生経験のうちには、同時に周囲世界もともに存在している」(GA61,96)ので

あって、それぞれ固有の領域を持ち、他の世界を排除することで成立するような世界が三つ存在するわけではない。「気づかひの仕方 (Sorgensweise)」(GA61,94) がどのように示されるかに応じて、世界の性格づけも異なってくることに対応させ、周囲世界、共同世界、自己世界の三つの世界に単に区分されているにすぎない。周囲世界は「気づかひの仕方」に応じて絶えず変化する。それゆえ、周囲世界には明確な限界は存在しない。周囲世界はそのうちでさまざまな出来事が生起し、われわれの諸活動が展開される、魅惑的な「刺激の場」である (GA61,96f.)。

さて、ここで問題となっているのは日常的な生世界のあり方である。生世界は自己世界を中心にした世界であるが、決して私秘的な世界ではなく、他者が最初から存在している世界である。われわれはこういう世界のなかへと生まれ出るのである。したがって、われわれの思考様式や「気づかひの仕方」は、時代や地域に特有な物の見方や考え方によって一定の制約を受けざるを得ない。ハイデガーはこのような制約を被解釈性 (Ausgelegtheit) と名づける。「事実的生は、受け継がれ、作り変えられ、あるいは新たに作られた一定の被解釈性のうちで常に動いている」(PIA241)。そして、制約を受けながらも、われわれに周囲との交渉を導いているのが配視 (Umsicht) である。「配視は生に世界を、さまざまな観点において解釈されたものとして、提供している。……このさまざまな観点はたいていは目立たないまま (unausdrücklich) 用いられており、事実的生はこれらの観点を目立った仕方では体得するというよりも、むしろ習慣を通じてそこへとはまり込んでいる。だが、これらの観点は気づかひという動性に対して、遂行の道筋を予め描いている」(ibid.)。

これまで述べてきたように、生きることは気づかうことである。しかし、日々の生活のなかでは、何を気づかっているのかについて、いつの間にか無自覚になってしまう。このような事態を、ハイデガーは「目立たない」

という語で特徴づける。習慣とは目立たないまま、繰り返し続くことによって形成されるものである。新しい習慣が生まれれば生世界が変わるし、生世界が変われば新しい習慣が生まれる。生(生活)と習慣が密接に関連している以上、「気づかひの仕方」は習慣的とならざるを得ない。習慣とは、生と気づかひとを考えるうえで欠くことのできない「生の根本的な諸カテゴリー」(GA61,96) である。

ただ、無自覚的な習慣となってしまうことについては、注意しておかなければならないことがある。頹落の問題である。ハイデガーは次のように言う。「頹落傾向のゆえに、事実的生は、本来は各自の生であるはずなのに、たいていの場合、各自の生としては生きられない。……事実的生は(誰でもない者)によって生きられ、あらゆる生はこの(誰でもない者)のために懸命に配慮的に気づかう。事実的生は常に何らかの仕方、非本来的な伝統と習慣にはまり込んでしまっている」(PIA243)。気づかうことは習慣を形づくるが、このことに無自覚になってしまうと、「各自の生としては生きられない」といった頹落を招くことになる。だが、改めて自覚しないほど定着しているがゆえに、習慣と言ひ得るのであり、自覚し続けることは決して容易なことではない。

以上、初期フライブルク講義に見られる事実的生の分析を、筆者なりの視点に立って再構成することを試みた。だが、本稿で取り上げた論点は事実的生の分析の一部にすぎず、残された課題は多い。筆者の今後の研究課題としたい。

註

ハイデガーの著作等からの引用・参照頁は次の略号を用い、本文中に記した。

GA *Gesamtausgabe*, Frankfurt a. M. 1975ff.

(巻数, 頁数の順で記す)

PIA *Phänomenologische Interpretationen zu Aristoteles*, in *Dilthey-Jahrbuch*, Bd.6, Göttingen 1989.

- (1) アウグスティヌス(山田晶訳)『告白』、世界の名著『アウグスティヌス』所収、中央公論社、1978年、377頁参照。ハイデガーもこの箇所を数度、言及している。Vgl.GA60, 246,263,280f.
- (2) molestia の解釈については、香川哲夫「「事実的な生」と「内-存在」——初期ハイデガーのアウグスティヌス解釈をめぐって——」(日本倫理学会編『倫理学年報』第51集、2002年、86頁以下)を参照。
- (3) アウグスティヌス『告白』、上掲訳書所収、366頁。
- (4) 田中秀央編『羅和辞典』、研究社、増訂新版15刷、1981年、379頁。
- (5) アウグスティヌス『告白』、上掲訳書所収、328頁。
- (6) ハイデガーは後に次のように述べて、世界を三つの世界に区分する考えを撤回する。「以前の諸講義で、私は事態をそのように見て、術語をこうした意味で把握した。しかし事態は根本的に誤っている。……他者は、たとえ世界的に出会うとしても、世界という存在様式を持たないし、決して持つことはない。それゆえ、他者は〈共同世界〉と特徴づけられてはならない」(GA20,333)。